

附属図書館の思い出：教養部分館と大学紛争

阿部 寿雄

1. 教養部分館

分館の成立については、昭和24年5月「国立学校設置法」の公布によって新制東北大学が発足した。旧第二高等学校（第一教養部）・旧仙台工業専門学校（第二教養部）・旧宮城女子専門学校（第三教養部）の図書課が統合して昭和32年（1957）4月名称を東北大学附属図書館富沢分校分館となった。

富沢分校が川内地区への移転によって昭和33年（1958）9月に川内分校分館となった。昭和39年（1964）4月教養部制の施行によって川内分校分館は教養部分館と名称を変更した。分館の事務機構は、事務

主任・管理掛・整理運用掛となり組織的に独立した分館となった。

川内地区はアメリカ占領軍のキャンプ跡でありその施設を分校・分館も共に利用している。建物の総べてがバラックの施設でそのままの状態でも再利用していた。当然分館の事務室・書庫・閲覧室の建物は雨漏りがして不充分であった。書庫のスペースについても不備で旧仙台工業専門学校の蔵書は別の建物に別置き利用には大変不便を感じていた。

2. 大学紛争

事務室の前には、駐留軍当時のチャペル（礼拝堂）があり大講義室として利用されていた。

教養部構内での一連の紛争は、昭和44年（1969）6月4日に全共闘学生による大講義室（チャペル）の占拠があり本格的な紛争のスタートであった。大講義室の封鎖解除を求めて大学側教職員と学生自治会系学生が多数集まり説得を深夜まで続けたが解決できなかった。この場所は分館事務室の目の前であり、紛争の巻き添えの恐れがあったので男子職員で臨時の宿直をし被害のないように見張りをした次第である。

6月5日にはヘルメット学生によって教養部本館（事務棟）が封鎖され、6日には理科研究棟が封鎖された。この間連日のように全共闘系（全学共闘会議系）学生と封鎖解除を求める民青系（日本民主青年同盟系）学生との衝突が連日のように激しくなり、分館を囲んでのトラブルがエスカレート化した。ゲバ棒・投石による衝突がある度に危険を感じトラブルを避けるために学生閲覧室・事務室の入り口等にバリケードを構築し紛争学生の侵入に備えた。この一連の紛争と連動して旧高専の図書資料を別置しておいた建物が一部の紛争

学生によって封鎖された。学生は10名程であったが鍵を壊され何度となく取り換えたが破られる始末であった。いかにして図書資料を守るかで学生と直接会って再三交渉をもち資料には決して手を触れないとの約束をとった。後日確認に行ったら雨漏りがあったので資料を移動しておきましたとのことで良心的な学生もおったので安心した。

教養部分館は学生紛争の中心に位置しており衝突の時は完全に学生に包囲される状態であった。事務室は大講義室（チャペル）の真前にあるため夜になると全共闘系学生による事務室の壁面に向かって竹槍（ゲバ棒）で突撃訓練が始まるので常に学生の行動を監視した。分館を守る意味で臨時の宿直を置き監視行動をとった。宿直は2名で夜間は交代で見張りをした。職員が少ないため身体的負担は厳しかった。担当者には苦勞をかけたと思います。また理科研究棟の封鎖解除に備えて、紛争学生からの投石予防のために研究棟側の窓ガラス総べてにビニールを張りガラスの破損に対応した。

理科研究棟の封鎖解除は昭和44年（1969）11月23日で警察機動隊の導入によって一部学生の抵抗があっ

たが封鎖が解除された。分館の宿直もこれで終わった。理科研究棟の教官室は破壊がひどく、図書館から貸出された図書の殆んどが破損し利用不能の状態となっていた。分館としては、この資料（約1千冊程）の廃棄処分することになった。処分するには破損資料と図書原簿・目録カード等の照合が必要である。また所在不明の資料も多数あり処分には相当の労力を必要とした。幸いにも図書館内の資料については特に被害がなかった。紛争期間中は種々問題が発生したが館員の一致協力によって1日たりとも閉館することもなく利用者サービスに務めた。

大学紛争は機動隊の導入によって封鎖解除で終息に向かっていたが学生同士のトラブルが継続的に発生していたので教養部構内でしばらくの間、機動隊による監視が続いた。分館においても学生のトラブルに対して万全の注意に務めた。教養部分館は、昭和47年

(1972) 4月制度上廃止となり本館と統合した。

○阿部寿雄氏

1958 川内分校分館整理運用掛

1964 教養部分館整理運用掛

1966 教養部分館管理掛

1974 渉外掛長

1974 本館閲覧掛長

1977 本館和書目録掛長

1979 本館受入掛長

1984 整理課図書館専門員

1987 医学分館事務長

1990 定年退職

後記

本記録は2011年に、附属図書館100周年記念冊子に収録されるはずであったものである。

当時附属図書館では、分館図書室も含めた全館体制で、東北大学附属図書館100周年記念事業実施ワーキンググループを組織し、いくつかの班に分かれて事業を分担していた。そのうち出版班では、過去100年間にあった出来事や主要な関係者に光を当てた記念冊子を編む計画を持っていた。この計画に付随して、過去の記録を調査したり、既に退官された関係者に寄稿やインタビューを依頼したり、集まった記録を電子的にアーカイブする仕組みを検討するなど活動を展開していた。

編集期限も間近い2011年3月11日、東日本大震災に見舞われた。全館体制であった事業も、各自職場や

自宅の復旧作業に追われ、事業の継続に組織的に注力する余力はなかった。

同年6月14日を皮切りに、100周年記念事業は、一部内容に修正を加えながらも予定通り実施された¹。新たな冊子の編集の見通しが立たないことから、出版班では急場の代案として、『東北大学百年史』に収められた関係箇所を本文とし採録する小冊子²の刊行へと、計画を切り替えた。

今回紹介した記録は、当時収集されながら上記の経緯により未公表となった一編である。在職最後の年であった高橋信野医学分館事務長が、阿部寿雄氏から手紙により寄稿を受けていたものである。

(菊地良直)

1 『木這子』Vol.36 (2), 2012.

2 『もっと近くに 煌めいて遠くへー東北大学附属図書館の歩みー』東北大学附属図書館, 平成23年10月.